

映画の新着情報

『もったいないキッチン』

この映画の監督であるダーヴィド・グロスさんは、世界で生産される食料の3分の1が食べられることなく廃棄されているという実態を背景に、ヨーロッパで廃棄食材を使って独創的なオリジナルレシピを考案する活動を続けてきた。その活動を追った前作『0円キッチン』では、ヨーロッパ5か国をキッチンカーで巡り、捨てられる食材をおいしい料理へ変身させ、数々のドキュメンタリー映画賞を受賞した。本作で監督は日本を訪れ、福島から鹿児島までキッチンカーで旅をしながら、コンビニエンスストアや一般家庭で捨てられてしまう食材を使い、「もったいないキッチン」を各地で開く。日本の食品ロスでは世界でもワーストクラスで、その量は年間643万トン（平成28年度推計）。日本の料理人や生産者たちと協力し、おいしく、楽しく、食品ロスの問題解決の糸口を探るドキュメンタリー。



©UNITED PEOPLE



©Macky Kawana

●『もったいないキッチン』
2020年/日本/95分/
監督・脚本：ダーヴィド・グロス
配給：ユナイテッドピープル
8月よりシネスイッチ銀座、
アップリンク吉祥寺ほか全国で順次公開。

公式サイトは
こちらから



*新型コロナウイルスの影響により、映画の公開延期等の可能性があります。事前に公式サイトなどでご確認ください。

SPECIAL NEWS

パレスチナのガザ地区 適切な医療廃棄物処理で 人々の暮らしを守る!

各国で新型コロナウイルスのパンデミックに対処するなか、JICAが3年前に始めた協力が今、効果を発揮している。パレスチナのガザでの取り組みを紹介します。



かつて研修で学んだことが、
現在の業務でも
生かされています!

ガザ南広域行政
カウンスル代表の
アリ・パルフムさん。



医療機関から出た医療廃棄物は分別・滅菌処理され、専用の容器に入れて回収される。

JICAがガザで医療廃棄物管理協力を始めたのは2017年。当時、ガザには医療廃棄物を適正に管理する仕組みがなく、JICAは体制構築をともに進めてきた。

そんなガザで医療廃棄物の管理にあたるのが、アリ・パルフムさん（ガザ南広域行政カウンスル代表）だ。

パルフムさんは約25年前、パレスチナ自治政府が誕生した直後に来日し、JICAの廃棄物管理に関する研修に参加。今ではガザ南部

における廃棄物行政のトップとして陣頭指揮を執っている。ふだんは廃棄物・医療廃棄物の収集・処理を担っているが、新型コロナウイルスの対策にも取り組むことになった。域外から戻ったガザ住民が、新型コロナ陰性と確認されるまでのあいだ、待機する隔離施設の廃棄物（ごみ）収集・処理も統括。作業員たちはマスクや手袋等を着用し、収集した廃棄物を滅菌処理して、決められた作業手順に則って最終埋め立て処理場へ運搬している。「隔離施設から出される廃棄物はウイルスが付着している可能性があり、処理には適切な感染防止対策が必要です。かつて研修で学んだことが、今回の危機対応に効果を発揮しました」と語るパルフムさん。

6月15日現在、ガザ地区の市中感染者数はゼロ、合計でも感染者は72人（死亡者数1人）。感染者はすべて外部からガザへ入域後、隔離施設待機中に陽性が確認されたもので、施設外での感染者は出ていない。世界有数の

人口密度を抱えるガザ、ひとたび市中感染が起きると急速な感染拡大につながりかねない。政治的な難しさを日常的に抱える同地区で、感染を封じ込めるため、隔離施設での安全で適正な廃棄物管理が、ガザ中・南部地区に暮らす92万人をウイルスの脅威から守っている。



廃棄物収集・処理用の車両を消毒する作業員。

JICAにおける
新型コロナウイルスの取り組みは
こちらから



本の新着情報

『プラスチック星にはなりたくない！ 地球のためにできること』

プラスチックごみの問題は世界的に注目されており、日本でも7月からプラスチック製の買い物袋が有料化される。ペットボトルや食品トレイなどプラスチック製品は便利な一方で、環境だけではなく、私たちの健康にも知らぬ間に害をおよぼしている。本書では、そんなプラスチック製品の誕生や、プラスチックごみが細かく砕けたマイクロプラスチックによる健康被害、廃棄物や海洋汚染などの課題を紹介し、主人公の「ぼく」と一緒に問題について考えていく。減らすだけではなく、再利用してごみにしない方法など、すぐに生活に取り入れることのできるアイデアも提案している。小学校低学年から読める環境問題の絵本。



読者
プレゼント
詳細は
p.38へ

●『プラスチック星にはなりたくない！
地球のためにできること』
ニール・レイトン 作・絵／いわじょう よしひと 訳／
高田秀重 日本語版監修／ひさかたチャイルド
1,600円（税別）



読者
プレゼント
詳細は
p.38へ

『アフリカにおける遺児の生活と学校教育 マラウイ中等教育の就学継続に着目して』

子どもたちの教育は未来の社会の基盤となるもの。世界では、小学校に通えていない子どもの半数以上がサハラ砂漠以南のアフリカ地域に暮らしており、学校に通えない背景には、貧困や劣悪な衛生環境、さらに子どもの労働、男女格差などさまざまな問題がある。本書はアフリカのマラウイにおいて遺児を対象に調査し、困難な状況にある子どもの生活と、学校教育について分析したもの。子どもの教育

のあり方を当事者である生徒、教師、保護者の視点から捉えている。最終章ではSDGsの目標にもあたる「質の高い教育をみんなに」にも関連した取り組みや、支援の在り方についても論じている。

●『アフリカにおける遺児の生活と学校教育
マラウイ中等教育の就学継続に着目して』
日下部 光 著／明石書店
3,800円（税別）

『世界を変えた15のたべもの』

ジャガイモ、トマト、トウモロコシなど、身近な野菜や穀物などの食品はいつ世界に広まり、どんなふうに使われてきたのか——本書は、そんな私たちがふだん何気なく食べている15の食材を取り上げ、イラストや図解で紹介。それぞれの食材についての生産量などのデータや、気候変動による栽培への影響、子どもでも簡単にできるレシピなども掲載されている。「アメリカ大陸へわたった食べもの」と「アメリカ大陸からやっ

てきた食べもの」の2部構成となっており、読んでいくなかで大航海時代から新大陸発見や、植民地化の歴史なども理解することができる。

●『世界を変えた15のたべもの』
テレサ・ベネイテス 著／フラビア・ソリーリャ イラスト／
中野明正 日本語版監修／轟 志津香 訳／大月書店
4,000円（税別）



読者
プレゼント
詳細は
p.38へ

あわせて
こちらも!!



『きいてみよう! 世界のことは こんにちは』

『世界を変えた15のたべもの』と同時発売された本書では、「こんにちは」「元気?」「お名前は何?」など、5大陸130以上の言語のあいさつや自己紹介文の言葉を紹介。先住民と植民地化の歴史など、各言語にまつわ

る簡単な解説もイラストとともにわかりやすく紹介している。本書を読みながら、100言語以上のネイティブな発音を聞くことができる専用ウェブサイトも利用でき、国際理解や外国語教育にも活用できる一冊だ。

●『きいてみよう! 世界のことは こんにちは』
ベン・ハンディコット 文／ケナード・バク 絵／上田勢子 訳／大月書店
5,000円（税別）